

テロに関する歪曲された言説

クレイグ・マレー（人権活動家、作家、元ウズベキスタンへの英国大使）著、脇浜義明訳、田中一弘補訳
Consortium News (CraigMurray.org.uk), 2025年1月8日 *脚注は訳注



レバノン、バールベクの瓦礫を調査しているクレイグ・マレー(2024年11月22日)。(Niels Ladefoged via craigmurray.org.uk)

もう止めようがない。西側の主力メディア記者は誰一人としてレバノンの爆撃現場を訪れ、イスラエルが空爆したのはヒズボラの軍事基地やミサイル基地だという主張が本当かどうかを確かめなかった。何故なら、私が何十もの爆撃現場で見つけたように、彼らは答えを知っていたが、それを書くことで彼らが給料をもらっている物語ではないことを心得ているからだ。

給料の対象となる材料が出てくると、彼らはたちまちダマスカスへ駆けつけた——爆撃で破壊された民家や救急センターやベッカー高原の国立学校の残骸に見向きもしないで。そして、米国、イスラエル、トルコが支援して出来上がった「改心した」HITS（ハイアト・タハリール・アル・シヤム）¹というスンナ派ワッハーブ派過激集団の「民主主義政府」を持ち上げるプロパガンダ記事を書いている。

以前私は大雑把に言って私と同じような政治観を持つ人々（例えばヴァネッサ・ビーリー）と論争したことがあった。何故なら私はアサド政権のファンではなかったし、アサド政権の人権迫害の批判者だったからだ。しかし、アサド政権を倒そうとしていたNATO、湾岸諸国、イスラエルが支援した過激派ワッハーブ「反乱軍」よりは、アサドの方がマシだと思っていた。

アサド政権の人権迫害を批判したからといって、西側の主流メディアが流すばかばかしい残虐行為プロパガンダに同意するわけにはいかない——アサド政権が15万人の囚人を一刑務所にぎゅうぎゅう詰めにして閉じ込めたとか、アサド政権が10万人を殺害して大きな穴に死体を投棄したとか、血痕の跡もない板を見せて「ボディ・プレス」拷問の道具だとしたこと、日焼けした米国人の写真を見せて、アサド政権によって7か月間も独房に閉じ込められていたという主張、小ざっぱりした服のアラブ人をアサド政権の拷問から救い出した人物だとCNNが紹介したこと等々、幼稚なプロパガンダに乗ることはできない。

¹ 2017年にアルカイダ系のアル・ヌスラ戦線と複数の集団で結成された。

この種の残虐プロパガンダは戦争には必ず付きまとう。ハマスの10月7日の奇襲レジスタンスに関して「60人の赤ちゃんの首をはねた」とか、アサドが10万人を殺害して穴に投棄したとか、非現実的で嘘丸出しであるにもかかわらず、いつでも繰り返される。NATOとイスラエルによるHTS新政府樹立も、「解放のよろこび」を演出するプロパガンダである。

西側メディアの動き



ウマイヤド・モスクでアサド政権崩壊を祝うシリア人(2024年12月14日)。(Voice of America, Wikimedia Commons, Public domain)

西側メディアはアサド政権崩壊後の解放の喜びを大々的に報道したが、確かに解放を喜んだ人々もいたであろう。しかし、暫くすると、非スンナ派ムスリムを殴打したり、即決処刑する数多くの事件があったが、そういう人権迫害は報道されない。西側メディアは目を閉じるか、もう済んだとして帰国したのであろう。「民主主義革命」だと宣伝されたが、選挙は4年先に先延ばしになっていること、アサド政権時代にいた女性裁判官を親ワッハーブ派政府は全部お払い箱にしたこと、イスラム法典に基づくとして正式巡視隊がダマスカス市内で髪と顔をむき出しにしている女性に警告するパトロールが始まったこと、昨日から学校で女生徒のヒジャーブ着用が強制化されたこと等々は、まったく報道されていない。また、イスラエルがシリア南部に侵攻して、シリアの飲料水と農業用水の40%を供給するダムを占領・支配しているのに、HTSはまったく抵抗しないことに関する報道もまったくない。ダムの



上に砲撃用砲床を建設、占領したシリア領土に13の恒久的軍事基地と、基地の間を結ぶ道路の整備あるいは建設をしている。そういう現実も西側メディアは報道しない。

2024年12月、シリアに進撃するイスラエルの車列。(IDF Spokesperson's Unit, Wikimedia Commons, CC BY-SA 3.0)

HTSはイスラエルのシリア侵攻・占領に反対しないどころか、イスラエルに歩調を合わせてレバノンに侵攻し、レバノン軍を直接攻撃した。しかも、HTSのレバノン攻撃は、イスラエルのシリア内の不法な前哨基地から出撃している。HTSが民族解放のアラブか植民地主義のイスラエルか、どちらの陣営かがはっきり分かる。

西側の安全保障アジェンダ

世界のネオリベラルが新HTS政権を賑やかに祝福したのは言うまでもない。西側のアジェンダは、HTSとウクライナの大義との結びつきにはっきり見られる。新シリア政府樹立にいち早く駆け付けたのは、西側大国に続いて、ウクライナ使節団であった。HTSのワッハーブ武装団の中で重要な役割を担ったのはウズベク族²民兵であるが、ウクライナのためにロシア軍の幹部将軍を暗殺したのはウズベク族民兵であったのは、偶然の一致ではない。

ウクライナ使節団のHTS政府訪問の後に続いたのは、何処にでも姿を現すハルピュイア³のようなドイツ外相のアンナレーナ・ベアボックであった。彼女はイスラエルのパレスチナ人虐殺を公然と熱心に支持する人物である。

シリア内戦で西側がアルカイダ系イスラーム戦線の後継テロ組織HTSを支援するのは、西側の一般人にとって戸惑う現象であったが、それへの一種の埋め合わせとして、当局は先日起きたニューオーリンズ事件⁴を「ISISに触発されたテロ攻撃」として、依然としてムスリムが公式の敵であると国民を納得させようとした。

この物語はあまりにも出来すぎていて、私にはああそうかと簡単に受け入れられない点がいくつかある。犯人のシュムスドゥーディン・ジャバーはうまい具合にISISの旗を凶器となった自動車につけていて、自分の「正体」を当局に分かるようにしていた。ISISの旗はこういう大量殺人事件の捜査では重要な品物であるが、それは、メディアがふんだんに写真撮影できるように置かれているように思えた。自動車が衝突したために落ちた状態でなく、道路の敷石の模様のように、何かのパターンに沿うように置かれていたのは、映像を見てすぐに分かった。何故この殺害現場の映像が大々的に拡散されたのだろう。何故ISISの旗が即席の杖に逆さまに吊り下げられていたのである。犯人が何らかの政治的意図で大量殺人をやって自分も死ぬつもりであったなら、象徴となる旗をもっと大切に扱ったであろう。そういう疑問が私を襲った。

当局の話では、ジャバーは「ISISに触発された」というもので、実際にISISの人間と接触したわけではなかった。だから、旗の誇示の仕方を教えてもらわなかったのかもしれない。しかし、ジャバーの自宅には、コーランなどアラビア語の本があった。だから、旗のアラビア語文字が逆さまになっていたら、すぐに分かったはずだ。

非常に奇妙なのはニューヨーク・ポストの記事だ。どうやら記者は鍵のかけていない無防備なジャバーのアパートに自由に入入りし、自由自在に証拠探しをしたようである。また、うまい具合にコーランが戦闘について述べた頁で開いているのを発見し、報道カメラは、化学薬品や明らかに爆弾作りをしていたところよりは、壁にかかっていたパレスチナ人の抵抗の象徴スカーフであるケフィエばかり写していた。

私は実際に何が起きたかを推測しているのではない。報道記事が不思議なほど完全かつ整っていることを指摘しているだけだ。

2018年に英国エイムスベリーで2人の毒殺及び毒殺未遂事件があったが、警察が被害者チャーリー・ロウリーとドーン・スタージェスの家を検査し、台所の誰にでも見えるところでノビチョク神経剤が入った香水の瓶を見つけるのに、丸5日間かかった。

これと対照的に、FBIは大変徹底的にジャバーのアパートから必要とされる証拠類をすべて押収し、ひよっとしたら共犯者がいるかもしれないので、部屋の中の痕跡を徹底的に法医学的検査を行ったので、その後報道記者が好きなように現場を荒らすに任せたのだ。

² 中央アジアおトルコ系民族。

³ ギリシャ神話の上半身が女性で、鳥の翼と爪を持った貪欲な怪物。

⁴ 正月に、シュムスドゥーディン・ジャバーというテキサスの米国人がピックアップ・トラックで群衆に突っ込んで、14人が死亡、35人が負傷し、次に車から降りて警官隊と銃撃戦をやった事件。車両にはISISの旗が掲げられていたというが、テロ組織と関係があるかどうかは不明。

このあたり、なにか不自然な感じがする。

ジャバーとリベルスバーガー

ジャバーとラスベガスのホテル前で自動車攻撃を行ったマシュー・アラン・リベルスバーガーの間に、経歴と自動車使用という点で、共通点があることに気づいた人がいるだろう。リベルスバーガーはジャバーの犯行と同じ日にラスベガスのトランプのホテルの前で花火と燃料を積んだトラックを爆発させて死んだ男である。自動車使用の攻撃が二人の意味ある共通点になるかどうかは分からないが、二人が軍隊経験者で、その経験によって精神を病んだ殺人者になる可能性が何よりも高いという点は、かなり重要な共通点であろう。

リベルスバーガーの場合は大変奇妙な特徴がある。私の印象に残っているのは、彼がトイ・ソルジャー（平和時の兵隊）ではなかったことだ。彼はかなりの実戦経験がある現役の特務部隊兵士だった。だから、その気になれば、本物の爆弾を作ることができたはずで、彼の家族もそう言っている。重要なことは、リベルスバーガーは自分のトラックに積んでいるのは本物の爆弾ではないことを承知していたことだ。また、米軍特務部隊兵士は、政府は容易に認めないが、ウクライナ兵の訓練を含め、ウクライナ戦争に関与したことは公けに知られている。

自爆攻撃者が攻撃が実を結ぶ前に進んで自爆するというような前例はない。しかし、当局の発表を信ずるならば、高度に熟練した現役の戦闘経験者が、本物でない簡易爆発物を爆発させる前に、自殺したということになる。実に奇妙な話である。それに加えて、リベルスバーガーの死体は焼け焦げて判別不能であったが、彼のパスポートが車の死体のそばに無事に残っていたということも奇妙で、テロ攻撃の伝統の中ではあり得ないことである。

西側諸国はテロ組織をシリア政権に据えたが、その一方で、米軍兵士からのテロ攻撃という非常に奇妙なブローバックを得ている。

しかし、国内テロに比べれば、HTS が世界で、とりわけ米国と英国で、非合法的なテロ組織と規定しているのに、それをシリア政府に祭り上げて祝福していることの方が、はるかに奇妙である。米国の「テロ事件」— とりわけニューオーリンズの「イスラム・テロ事件」のために、テロ組織 HTS を正常化する工作はかなり困難である。

クリスマスと正月のためにスコットランドへ帰郷した後、バイルートへ戻るつもりであった。正直に言うと、私は前にもあったように、あるいは親パレスチナの立場をとる多くの真面目な記者がそうであったように、テロ防止法で逮捕されるのではないかと思っていた。英国のテロ取り締まり警察は、これまで、パレスチナでのジェノサイドや大イスラエル作りの真実を語ると非合法組織ハマスやヒズボラを支援する言論だと扱い、逮捕や押収の対象とした。しかし、HTS も非合法組織であるのに、英国はそれを支援する談話を正式に発表しているのである。MI6 の元長官のジョン・サワーズはテレビで「HTA をもう非合法組織から外すべきだ。それはまともな組織となっているから」と発言した。元外交官で学者のロリー・スチュワートとジャーナリストでアナウンサーのアラスティア・キャンベルは自分たちのブログで HTS を賛美した。

Contents

[Proscription criteria](#)

[Aliases](#)

[Proscription offences](#)

[Deproscription](#)

[Asset freezing](#)

[List of proscribed international terrorist groups](#)

[List of proscribed groups linked to Northern Ireland related terrorism](#)

 [Print this page](#)

Al Qa'ida (AQ) - Proscribed March 2001

Inspired and led by Usama Bin Laden, its aims are the expulsion of Western forces from Saudi Arabia, the destruction of Israel and the end of Western influence in the Muslim world.

The government laid Orders, in July 2013 December 2016 and May 2017, which provided that the "al-Nusrah Front (ANF)", "Jabhat al-Nusrah li-ahl al Sham", "Jabhat Fatah al-Sham" and "Hay'at Tahrir al-Sham" should be treated as alternative names for the organisation which is already proscribed under the name Al Qa'ida.

英国の反テロ法の 12 条にはびっくりするような厳しい面が 3 点ある。

1) 単に「意見を言う」だけで 14 年間の刑に服す場合がある。

2) 意見の意図は特に不必要である。意図の有無にかかわらず、意見が他の人に非合法組織支持に向かわせる恐れがあったら、無謀行為で有罪となる。つまり、積極的にそのような意見を言うのを避けようとしなかったから、有罪となる。

3) 何が非合法組織であるかは政府だけが決定する。ある組織が非合法にされることに反対する議論をすれば、それは犯罪になる。もし政府がガール・ガイド連盟を非合法と決定する場合、ガール・ガイドは法律上テロ組織となる。

この12条は英国政府のルワンダ計画（難民申請者をルワンダへ送ってルワンダで申請の裁定を受けさせる）に関する最高裁判所の判決と類似している。最高裁は、政府の役人がルワンダが安全な国だと言っただけでルワンダが安全な国にならない。ルワンダに送られた難民申請者が母国送還（国連難民条約などが禁止している）される危険があると判決した。しかし、パレスチナ・レジスタンス・グループを西側政府がテロ組織と言っただけではテロ組織にならないという法的異議申し立てをやっても、勝った試しはない。

それが難しいところだ。英国では、政府は自分たちが作った法律に従わなければならないというのが、今も法的虚構として残っている。17世紀にチャールズ1世を処刑した目的は、統治機構といえども国家の法律を任意に破ることはできないということを示すためだった。それは目的を得た行為であったように思えた。

政府が、例えば枢密院勅令などを通じて HTS をテロ組織とする規定を失効させる法を制定するまでは、英国では HTS を支援することは違法である。ジョン・サワーズやアラステア・キャンベルやロリー・スチュワートのような元官僚はもちろん、政府の大臣が HTS を支援するのは違法である。しかし、実際には、ハマスやヒズボラを言論で「支援」する人を警察が逮捕したり嫌がらせをやり、王立検察庁が起訴し、一方 HTS を物理的に支援する行為は罰せられないという、巨大な偽善が罷り通っているのである。

法が無視される状況に、陪審員だって気持ちよくないだろう。

だから、私が以前のように反テロ法で逮捕されることがなかったのは、政府が非合法組織 HTS を支援・協力していることが法律の信用失墜を招いているせいであったかもしれない。また、ロンドンのイスラエル大使の家の前のデモを取り締まるのに、警察は反テロ法ではなく公共秩序法を使ったのも、そのためかもしれない。以前ならそういう場合反テロ法を使っていた。

英国では言論の自由を抑圧するために当局が使える法律の幅はびっくりするほど広い。今も反テロ法でパレスチナ・アクションの共同創設者リチャード・バーナードとパレスチナ連帯運動の創設者トニー・グリーンステインへの裁判が続いている。反テロ法12条のびっくりするような厳しい規定は、法治文明国家としては恥さらしもいいところである。

今後も多くの紆余曲折があるだろう。西側諸国がガザ・ジェノサイドに関与していることの悪影響が西側社会で現れるだろう。しかも、その悪影響は、富の格差の増大や社会的移動 — 上昇移動 — の停滞などのために、政治システムの崩壊、社会的まとまりの急速な破綻、国民的同意の失墜という背景のもとで起きるのだ。

中東の出来事を正しく伝えるためにバイルートへ戻るが、出来ればシリアへも入りたい。しかし、HTS 政府や民兵からの危険な弾圧を覚悟しなければならない。独立した調査報道は、皆様からの資金援助があってこそ可能だ。

正直言って、クリスマス前の2か月間レバノンで取材活動でかなりの出費だった。おかげで4本のミニドキュメンタリー、ビデオ報告や記事の執筆し。そのなかには何百万人の視聴者を獲得したものもある。視聴者や読者のカンパに依存する取材活動は大変である。もしまだ金銭的な貢献をしていないのであれば、そうしていただけるとありがたいです。もしあなたが貢献しているなら、他の人にもそうするように促すことで、さらに支援できるかもしれません。カンパをお願いします。ただし、私はいつも強調していますが、少しでも経済的に困窮するような人には貢献してほしくありません。